様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年　４月　１日現在

機関番号：16201
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2008～2011
課題番号：20720039
研究課題名（和文）　R．ヴァーグナーのオペラにおける「詩のメロディー」の生成と音楽のリアリズム
研究課題名（英文）　Generation of *Versmelodie* and Musical Realism in R. Wagner's Operas

研究代表者
稲田　隆之（INADA TAKAYUKI）
香川大学・教育学部・准教授
研究者番号：00452665

研究分野：音楽学（西洋音楽史）
科研費の分科・細目：芸術学・芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：ヴァーグナー、詩のメロディー、音楽と言葉の関係

１．研究計画の概要

本研究は、ドイツの作曲家リヒャルト・ヴァーグナー Richard Wagner (1813-83) のオペラにおいて、音楽と言葉が緊密に結びついた歌唱旋律である「詩のメロディー Versmelodie」がいかにして生成し、それが音楽表現におけるリアリズムをいかにもたらしたのかを明らかにすることを目的とする。また音楽と言葉の関係の観点から、ヴァーグナーのオペラとそれ以後の作曲家への影響関係を明らかにする。

２．研究の進捗状況

具体的な分析の観点は次の通りである。(1)リブレット（台本）の詩形を確認した上で、その韻律が音楽の拍節法とどのように一致／矛盾しているのか。(2)強音節に当たる言葉が、歌唱旋律においてどのように音楽的アクセントを加えられているのか。(3)伝統的な韻律法に基づくテクスト（音楽の韻文）がどの程度音楽の方形化（４小節フレーズ、音楽の韻文）をとっているのか。(4)それに対して、頭韻によるテクスト（言葉の散文）にはどのような音楽フレーズが適応されているのか。(5)詩（言葉）の各音節の背景にはどのような和音が与えられているのか。

こうした観点による研究により、以下のことが明らかになっている。

(1)ヴァーグナーが伝統的な韻律法を排除するきっかけとなった詩形「５脚のヤンブス詩行」は、そもそも音楽史やオペラ史のコンテクストから取り入れられたものではなく、演劇的な観点からによるものであること。(2)音楽の方形化は楽劇以降でも重要な機能を果たしている。(3)詩のメロディーは単なる歌唱旋律なのではなく、その背後で鳴っている和音ないし和声との関係が重要であること。とりわけ、歌われる音が和音構成の第何音なのかが重要であり、根音から遠いほどネガティヴなニュアンスを込めている。また属和音→主和音の機能を崩壊させながら常にそれを意識する大きな枠組みでの和声進行も重要な役割を果たしている。(4)その一方でリズム面は極めて保守的な立場を示していること。(5)楽劇作品においては、言葉の韻文／散文と音楽の韻文／散文の関係が重要であること。伝統的な韻律法を再び採用した《マイスタージンガー》では、古くて新しい手法が探求されているが、ここでは音楽と言葉の亀裂が必ずしもネガティヴな意味だけを示しているのではないこと。(6)マーラーの交響曲においても、言葉の詩形や韻律、それと対応する旋律形、音楽の方形化とが結びあっている。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。
（理由）
詩のメロディーの生成という意味では、音楽と言葉の緊密な関係を求め始めたすべての楽劇作品を分析対象に論文にすることができた。《ニーベルングの指環》においては、頭韻によるテクストそのものが音楽のフレーズ構造とは亀裂を起こさず、それに代わるものとして和音ないし和声との関係によって音楽と言葉の一致や亀裂を起こしていることが明らかとなった。《トリスタンとイゾルデ》では、言葉の韻文／散文と音楽の韻文／散文の関係の「ねじれ関係」という新しい

視点を提示できた。《マイスタージンガー》では、古い伝統的な手法によって新しい音楽と言葉の関係を生みだす試みがなされていることがみえてきた。そして最後のオペラ《パルジファル》では、これまでの集大成が図られていることを明らかにできた。

またヴァーグナー以降の作曲家マーラー（1860-1911）の交響曲作品に対して、同様の分析方法を適応したところ、彼ならではの世紀末的な立場が明らかになった。また、本来声楽作品に適応する韻律論的な観点を器楽作品にも応用する手がかりを見つけることもできた。

４．今後の研究の推進方策

これまでと同様に分析を続けていく。とりわけこれまでの研究の中で仮説として提示した問題については、より徹底した分析をする必要がある。

５．　代表的な研究成果

〔雑誌論文〕（計５件）

① 稲田隆之「ワーグナーのオペラにおける音楽と言葉の関係――５脚のヤンブス詩行の問題から詩のメロディーへ」、『ワーグナー・フォーラム』（東海大学出版会）、2011年７月刊行予定、査読無。

② 稲田隆之「《大地の歌》と《交響曲第９番》における「死」と「永遠なるもの」～韻律論から読み解くマーラー（上）」、『フィルハーモニー』、2010年４月、46-51頁、査読無。

③ 稲田隆之「イゾルデの〈愛の死〉における「詩のメロディー」――言葉と音楽のねじれ関係をめぐって――」『メディア・記号・芸術』、第２号、103-124頁、東北大学大学院情報科学研究科メディア記号論研究室、2010年３月、査読無。

④ 稲田隆之「ジークリンデの叙事的物語における「詩のメロディー」――《ヴァルキューレ》における「詩のメロディー」序論」、『香川大学教育学部研究報告第Ⅰ部』、第132号、1-17頁、2009年10月、査読無。

⑤ 稲田隆之「フーゴ・ヴォルフの《メーリケ詩集》におけるリート作曲技法――詩の韻律と歌唱旋律の関係の分析」、『音楽学』第53巻３号、145-157頁、2008年８月、査読有。